

平和台から石澄滝まで

箕面八・七丁目、新稲二・一丁目

2004.5.11

箕面で最初に大規模開発された急傾斜地の住宅地

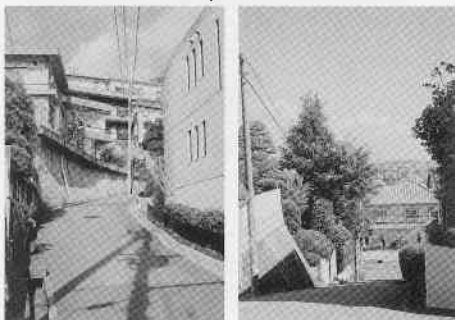
◆平和台

「平和」という言葉がまた新鮮な響きを持つていたころ、昭和四〇年代（一九六五）

初めに「平和台」は開発されました。平和台と呼ばれている箕面八丁目とその下に続く七丁目は、山麓線の道路から最上部まで一〇〇メートル近い標高差のある急傾斜地の住宅地です。急傾斜地が住宅地として大規模に開発されたのは、箕面ではここが最初です。

平和台は「平和台

まちづくり計画」によって良好な住宅環境の保全がはかられており、そのため他の住宅地のようにな商店の混在もなく、また三階建ての家もないので、全体にゆったりした、落ち着いた住宅地です。



箕面8丁目
平和台下部の坂道

箕面8丁目
「25%」の標識が立つ急な坂道



新稲1丁目 府営紅葉丘団地

◆新稲北部

新稲一丁目の府営紅葉丘団地は、箕面で最初の公営住宅団地。桜の花時が美しい。住宅があるのは箕面駅に近い新稲一丁目の東半分までで、それより西と新稲二丁目は主に農地と山林。

新稲二丁目にはスカイアリーナ、市民体育館、総合運動場など市のスポーツ施設と大阪青山短大があります。タウンウォッチングのあと、池田市との境界を流れる石澄川をさかのぼって石澄滝まで行きました。

新稲（南部）

新稲三・七丁目

2005.10.18



新稲6丁目

植木の村 新稲旧集落

新稲は八年前に一度タウンウォッチングで来ています。自然の多いこの地区に来るとなぜかホッとした気分になります。花畑や植木畑に囲まれた新稲の旧集落は市街化調整区域に指定されているので、他の地区に比べると変化がないように見えますが、それでもこれまで木造、瓦葺きだった家がタイル張りの外壁の四角い建物に建て替えられたり、雑木林が老人ホームになったり、変化は徐々に押し寄せています。

私たち外部から訪れる人間は、昔ながらのどかな農村風景がいつまでも残ってほしいと願うのですが、ここで生活している人々のことを考えると、これも止むをえないことでしょう。

新しい住宅地

新稲四丁目の桜池地区は早くから建築協定を結んだ地区です。今も整ったまちなみが見られます。

また新稲七丁目は桜ヶ丘の延長のような住宅地です。七丁目の中央線沿いは道路と北側の住宅との間が細長い緑地になっていて、低木や高木が茂り、ちょっと好ましい空間になっています。



新稲5丁目

新稲7丁目 中央線緑地

桜ヶ丘

変わりつつある桜ヶ丘

「まちなみ」は生きています。桜ヶ丘とてその例外ではありません。

一番最初に桜ヶ丘に「まちなみ」が生まれたのは大正住宅博覧会の二五戸の住宅でしょう。次いで、今の洋館通りの西側一帯を初めとして、大邸宅が広がっていったのが昭和時代の戦前期です。

五〇年前ぐらいから、今の二丁目の東と南の箕面川に向かう斜面や、三丁目の西半分から四、五丁目など西の石澄川に近い土地、阿比太神社周辺の一丁目へと住宅地が次第に広がってきました。

側に続く立派な生け垣

や、広い屋敷の中の見事な樹林、大きな樹木は、桜ヶ丘だけに見られるすばらしい景観ですが、これをいつまで維持できるのでしょうか。

相続や売却によって広い敷地が数戸に分割されれば、連続した生け垣が短く途切れたり、樹林や樹木が切られることも多くなるでしょう。そのようなことをできるだけ最小限に留めるよう工夫するのが、これからの課題といえるでしょう。

2005.7.19



洋館通り (桜ヶ丘2丁目)



生け垣が続く (桜ヶ丘1丁目)



新しいまちなみ (桜ヶ丘1丁目)

今日の課題

桜ヶ丘にとって新しい問題といえば、桜ヶ丘の最初の時期から続いてきた大邸宅が、相続などの理由により分解していくことです。田村橋通りや紅葉橋通りに見られるように、通りの両

タイムスリップみのお

【桜ヶ丘「住宅改造博覧会」】

阪急電鉄の桜井から、桜井の住宅地を通り抜け、箕面川を越えて少し急な坂道を上ると、右側に二本の半円状の道路のついた一角があります。ここに二五戸の洋館が建てられていました。今は八戸を残すのみとなりましたが、建て替えられた家も辺りの空気になじんでいて、どことなくハイカラな雰囲気を感じられます。

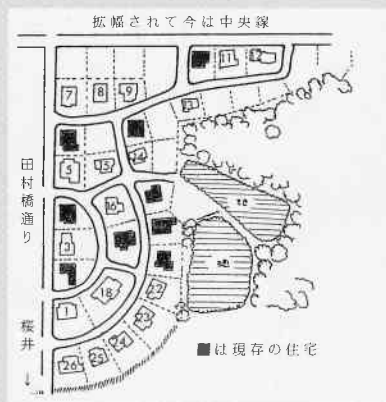
今「洋館通り」と呼ばれているこの一帯で、大正一一年(一九二二)「住宅改造博覧会」が開かれました。一〇月八日の開場式では、まず主催者日本建築協会会長の片岡安が開催の趣旨を説明した後、博覧会総裁後藤新平子爵、大阪府知事、大阪市助役が祝辞を述べ、また朝日新聞の創業者、毎日新聞社主らも列席しています。この顔ぶれを見ても、この博覧会が当時としては画期的なものであったことがわかります。

博覧会に出品された住宅は、敷地は七五〜二〇〇坪、いずれも洋風が基調で、多くは居間・食堂・書斎・応接間などをイス式とし、女中部屋、老人室、寢室などに畳を残し、また間取りもこれまでの客間中心でなく、居間中心あるいは中廊下式です。このように、和風住宅に洋風の応接室をくっつけたそれまでの「和洋折衷様式」とは違って、住宅全体が洋風を主体としたものになっています。

またこれらの住宅は、博覧会終了後に取り壊される張りボテの建物ではなく、そのまま土地付きで即売を予定しており、構造は木造ですが入念な施工がされています。上下水道が完備し、風呂は和風の箱風呂、便所は水洗式、簡易温水暖房までありまします。これまでとされた設備や器具は、今日のように既製品がないためすべて手づくりの

設計です。

大正三年(一九一四)から五年続いた世界大戦によって日本の工業生産高は五倍以上に伸び、経済の発展と共に個人主義、自由主義の風潮が高まります。生活の面では明治時代以来の古い生活様式を改めようとする家庭生活改善運動が起り、洋風生活を模倣し取り入れようという気運が盛んになります。「住宅改造博覧会」もそのような動きの一つでした。



当時の「住宅改造博覧会」出品住宅の配置

博覧会に敷地を提供したのは土地所有者の田村真策で、当時まだ珍しい水道施設を設け、みずからも一戸の住宅を出品しています。彼は博覧会終了後協会出品の八戸を買い取り、協会事務所に使った建物は桜ヶ丘倶楽部とし、箕面川の橋のたもとに五戸建ての長屋を建てて売店を経営するなど、住宅地の便宜をはかっています。彼の名前は今も「田村橋」として残っています。この博覧会は、地主の田村が自分の土地を高級住宅地として売り出すための戦略だったのかもしれない。

【参考文献】

「大正「住宅改造博覧会」の夢」

INAX BOOKLETT 一九八八年